

大学等名 北海道医療大学
テーマ名 テーマ1：地域活性化への貢献
取組名称 地域への健康支援と融合・連携した学生教育
取組学部等 歯学部、看護福祉学部
取組担当者 歯学部教授 千葉 逸朗
取組期間 平成16年度～平成18年度
Web サイト http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~clinic/d_plaza.html

取組の概要

北海道医療大学は、地域連携を構築する上でほどよい人口二万人の町・当別町に立地している。当別町は、平成15年に施行された健康増進法に先立ち、「みんなでつくろう健康とうべつ」という健康推進計画を立案した。従来から本学歯学部が同町に立地していることから「歯の健康」も含めた対策となった。そこで本学は「当別町二万人歯の健康プロジェクト」を立ち上げ、町の中心部に歯科健診施設「歯の健康プラザ」を設立した。「歯の健康プラザ」の特色は、今日の歯科診療が歯に問題があると自覚して来院する「患者待ち体制」であるのに対し、地域住民全員が歯科健診できる体制を教育機関と行政が一体となって整備し、住民の健康増進を図ることにある。さらにここを舞台に町民を模擬患者として養成し、学生教育へも参加できる体制を構築した。これは全国でも類をみない「キャンパスレス教育」という新たな考えの実践となり、新しい口腔健康管理モデルを世に提供するとともに、本学の学生に対して、新しい教育の場を提供する。

実施の経緯・過程

平成16年度は「歯の健康プラザ」を舞台に下記に示すような活動を推進した。

まず住民への周知とニーズの汲み上げのために、学生が町内をまわり、住民と接することにより、本施設の意図するところを説明した。これは、学生にとって「接遇」の絶好の機会である。また、成人歯科健診（歯科検診＋口腔保健指導）の拠点として、歯科健診専用のユニットを備えたことにより、標準化した歯科健診が可能となり、地域住民の口腔の健康に貢献しているとともに、健康日本21の目標の達成を目指した。また住民と大学の学生、教員との交流を深めるために、上記の施設において多様な活動（歯と口の健康教室、妊婦を対象にした母親教室、模擬患者講習会、歯と口の健康をテーマにした演劇、こころの健康相談など）を展開した。学生は習う立場であるとともに、教える立場も経験でき、医療人として患者とのコミュニケーション能力の育成に大いに役立っている。

平成17年度以降の展開

- 1) 成人歯科健診、歯科保健教育：地域住民の口腔状況を把握し、健康増進を図る目的で年間約1,700名の歯・口腔の健診を行った。当別町では健康推進事業「みんなでつくろう健康とうべつ」を行っており、その1分野「歯の健康」に貢献し、報告書等の資料作成、情報提供を行い、町民に還元した。また健康手帳を配布し、歯科衛生士による教育活動の徹底により、町民の口腔保健に対する意識は確実に高まった。
- 2) 口腔疾患を持つ患者の掘り起こし：「歯の健康プラザ」での口腔保健事業推進の資料とするために学生が当別町内を戸別訪問し聞き取り調査を行うことにより、住民のニーズの把握に努めた。
- 3) 学生教育への住民参加：医療面接の授業を充実させるために20名以上の模擬患者（SP）を養成した。SPを活用することによりリアリティのある医療人教育を行い、コミュニケーション能力、問題解決能力の育成を図った。
- 4) 歯学部低学年学生の総合学習の場：将来の口腔保健の充実を図るためには子供達への教育が必須であり、そのために、「小学生1日歯医者さん体験」「病院探検隊」「6474（むし歯なし）キャンペーン」などを実施した。子供達を教育することにより、保護者への影響もあり、地域住民のデンタルIQの向上に資することができた。また、各イベントには本学学生が参加し、子供達と触れ合う機会を得、口腔保健教育の重要性を体感できた。
- 5) 歯科学生の学外臨床実習の場：歯学部4年生の小児歯科実習の一環として本年度より当別町内の全保育所の園児を対象に視覚素材等を用いた口腔保健教育と個別口腔保健指導を行った。すべての4年生の歯学生が小児と触れあい、また、園児にとっても個別に指導を受け、歯と口腔の健康について意識する機会となった。
- 6) 口腔保健に関するボランティア活動：プレイハウス（小学生の一時預かり施設）に歯学部学生、歯科衛生士専門学校生徒らが参加して、小学生と親交を深めつつ、視覚素材等を用いた口腔保健教育と個別口腔保健指導を行った。
- 7) 在宅医療訪問相談：歯の健康プラザのスタッフが戸別訪問し、口腔ケアを実施するとともに、町内の病院、老人会

などで講演などをする機会を増やし、高齢者の口腔の健康管理の重要性を訴えた。

8) こころの健康相談：当別町では自殺件数が多く、「こころの健康相談」を看護福祉学部教員の指導のもとに大学院生が毎週水曜日に行うことにより地域の精神保健に寄与した。

9) 住民の交流、あるいは地域や本学の活用を目的として、「食」あるいは「健康」をテーマにした講習会：成人を対象に口腔保健と栄養・食生活に対する意識を高めるために「食」をテーマに様々なイベント（ハーブティー教室、チーズ教室、蕎麦打ち教室、マタニティー教室など）を開催した。イベントを通じた口腔保健教育により、その重要性を認知し、住民のニーズを発掘することができた。また、救急救命講習会では町民だけでなく本学学生も多数参加し、町との交流のみならず、医療人となるためのモチベーションを高めるのに有用であった。

目的に対する成果、人材養成面での達成度

成人歯科健診、歯科保健教育：通常の「歯科検診」ではなく、口腔保健指導を含めた「歯科健診」を推進するための当別町2万人歯の健康プロジェクトを遂行した。そのために歯科衛生士のトレーニングを行い、疾患に対する感受性や生活習慣の違いなど、「個体差」を考慮した個別の保健指導を行っている。歯科保健教育（特に主婦、自営業者）においては、地域住民の口腔状況を把握し、健康増進をはかる目的で、年間約1,700名の歯・口腔の健診を行った。当別町では健康推進事業「みんなで作ろう健康とうべつ」を行っており、その1分野「歯の健康」に貢献し、報告書等の資料作成、情報提供を行い、町民に還元した。また、健康手帳の配布や、歯科衛生士による教育活動の徹底により、町民の口腔保健に対する意識は高まった。

学生教育への住民参加：当別町民からボランティアとして養成した模擬患者（SP）をOSCEや医療面接の授業に活用している。SPを用いた授業には臨場感があり、コミュニケーション能力、問題解決能力を持つ優れた医療人の育成に貢献するとともに、学生教育を通じて地域と大学との交流を深めている。現在も「歯の健康プラザ」をその養成の場、あるいは課外授業の場として有効利用している。SP養成直後より、歯学部4年生の「歯科医療行動科学」を改変し、SPと直接対話することにより、今まで見学に終始してきた医療面接の実習がリアリティを持って可能となり、スムーズにOSCEに移行する体制が出来上がったことに加え、低学年からのカリキュラムの改変にもつながった。

歯学部低学年学生の総合学習の場：「小学生1日歯医者さん体験」「病院探検隊」「6474（むし歯なし）キャンペーン」などを実施した結果、本学職員の教育力のアップ、あるいは地域住民のデンタルIQの向上に資することができた。また、各イベントには本学学生が参加し、子供達と触れ合う機会を得、口腔保健教育の重要性を体感できた。

歯科学生の学外臨床実習の場：前述した通り、歯学部4年生の小児歯科実習の一環として本年度より当別町内の全保育所の園児を対象に視覚素材等を用いた口腔保健教育と個別口腔保健指導を行った。すべての4年生の歯学生が小児と触れあい、また、園児にとっても個別に指導を受け、歯と口腔の健康について意識する機会となった。

口腔保健に関するボランティア活動：プレイハウスでの活動に歯学部学生、歯科衛生士専門学校生徒らが参加することにより、小学生と親交を深めることができ、保健教育の重要視を認識できた。通常は遊びの場であるこのような施設を活用することは大変有意義であると思われる。「歯の健康プラザ」をこのような目的で使用したこともあり、今後の展開に大きなヒントとなっている。

自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

学生教育カリキュラム：全国の歯科大学、あるいは大学歯学部において、これほどの規模で、また、地域と連携した形でSPを養成している所は少ない。これは「大学のある町」当別町に立地する本学だからこそ実現できるものであり、「キャンパスレス教育」を具現化した例の一つである。現在、本学歯学部のカリキュラムも徐々に変化しつつある。低学年から高学年まで一貫したコミュニケーション教育を行うべく改変中である。これもSPを活用した授業が大きなインパクトとなっていることは言うまでもない。OSCEが最終目標ではなく、医療人養成の一つの評価法としてOSCEを位置付けるべきであり、その全体像を学生に示すことができるようなシラバスを作成するべきである。さらに、医療系総合大学として、学内の他学部での活用も目指している。歯学部のみならず、本学心理科学部でもOSCEが行われ、SPが活躍した。また、薬学部は6年制への移行に伴いOSCEを施行する。

研修医教育：さらに学部学生だけでなく、研修医の教育にも影響を与えられ、現在の研修医制度は満足したばかりで未熟であり、様々な問題点を抱えている。その一つに研修医の臨床能力不足がある。見学主体で卒業した学生に臨床能力など望むべくもない。従って、卒後に改めて教育をしなければならぬ事態に遭遇する。そ

ここでSPの活躍する場がある。特に初の医療面接トレーニングには力を発揮すると思われ、平成19年度より研修医教育プログラムに組み込む予定である。

当別町からあいの里へ：本学は当別にキャンパス（歯、薬、看護福祉学部）とあいの里キャンパス（心理科学部）を擁する。また、医療施設も当別の歯科内科クリニックと、あいの里の北海道医療大学病院を設置している。当別とあいの里は近接していることもあり、教員や学生の行き来も盛んである。本取組で行ってきた地域連携はあいの里でも生かされている。小学生を対象とした1日歯医者さん、あいの里で行われる「あいあい祭り」での様々なイベント、北海道医療大学病院を見学する「病院探検隊」などは当別で行ってきた取組の波及効果と言ってよい。

学生等の評価

SPを活用した授業（抜粋）

- 1) 今日、実際の患者と面接して、頭では分かっているのに、うまく頭の中で整理がつけられず、聞く順番もバラバラになってしまい、言葉もたどたどしかった。もう少し落ち着いて、一回、頭の中で整理してから話せばもっとコミュニケーションがうまくとれると感じた。
- 2) 実際に患者さんに対面してみると言葉のつかい方や誘導の仕方が難しく時間が余ってしまいました。いろいろなパターンの患者さんに対応できるよう日ごろから周りの人を観察していろいろな人に慣れていきたいです。患者さんの気持ちをくめる余裕ができるよう日頃から勉強しておくことも必要だと感じました。
- 3) 実際患者さんを目の前にし、何の資料（問診の）もない状態で必要な情報を得るとなるとこんなに大変な事なのだとは思わなかった。もう少し心をおちつけマニュアルにこだわらず一人一人に合った聞き方、答え方を考えていかなければいけないと思う。
- 4) 自分が歯科医師役をしてみて、すごく緊張して、手がふるえた。何を話したらいいのか分からなくなった時もあった。言葉遣いも少し変な部分があったりして、患者さんにとっては聞きづらかったかもしれないと心配だった。

歯の健康プラザ

- 1) 問題点は、大きく分けてニーズの問題、雰囲気の問題、施設の問題であった。ニーズの問題は、町民が予防歯科に興味がない、きっかけがない、何をやっているのかわからない、あまり町民に知られていないといったことが挙げられた。これに対する対策は、幼稚園・小学校に行き子供のころから予防歯科の重要性を教育する、小学校の総合学習の一環として取り入れてもらう。きちんとマーケティングを行うなどが考えられた。雰囲気の問題は、入りにくい、気軽にいけない、店構えが華やかではないなどが挙げられた。これに対する対策は、運営を週3日ではなく毎日にする、町民の憩いの場になるようにする、といったことが挙げられていた。施設の問題として、その場で治療できないのは二度手間である。これを改善するため、要治療の場合はすぐにクリニックへ送迎するシステムを作るといった案が出ていたが、これは人員・コストを考えると現実的には難しいように思う。その他の改善策として、ホワイトニング（審美的な歯科診療）を行う、歯科用品専門店の併設などが挙げられていた。

個人的な意見ではあるが、大学と町民をいきなり繋ごうとせず、間に町内の6軒の歯科医院を挟むというのはどうだろうか。歯科医院との連携を強化し、高度な治療が必要な場合は大学病院に回してもらい、大学は積極的に新技術などの勉強会を開催し、町の歯科医院にフィードバックする、というのはどうだろうか。町内の歯科医院のクオリティが上がれば評判となり歯科への関心も高まるのではないか。

- 2) 学生無しにA町の活性化を図ることなど皆無に等しいのだから、キーポイントは学生である。町内に若者が大勢いるのだから若者の力を借りれば良い。また、カリキュラムが密であり、レポートや課題の多い歯学生にとってはなかなか難しい話だ。そこでまず私の考えた案は『全学部の学生のT施設での定期的な歯科健診の必須化』である。そして、歯科健診時の補助や、歯科健診以外のT施設を活性化させるための運営、企画、これもまた学生が行う。このような具体的に上二つの活動をしていくことで確実にT施設に学生が集まるようになり、A町への学生の流入は増加、活性化に繋がるとおもわれる。

学外からの評価

事業外部評価 当別町福祉行政関係者

平成16年度に設立された歯の健康プラザは、大学と連携したまち、当別のまちづくりの一翼を担った。北海道医療大学の学生と教職員を含めた人数は約三千人にも及び、そのうち約一千人の学生が人口二万人弱の町に住み、様々な

活動を展開している。

プラザの活動

北海道医療大学は平成16年8月に商店街の空き店舗を利用し、地域住民の口腔健康管理を推進し、学生とのコミュニケーションの拠点となる「歯の健康プラザ」を立ち上げた。ちょうど当別町では、「みんなでつくろう健康とうべつとうべつ健康プラン21」という健康増進計画を策定中であり、歯の健康を栄養、運動、こころの健康とともに4本柱の一つに位置づけた。住民のセルフケア能力を高め、健康づくりを口の中からすすめていこうと地域住民、関係機関、行政が連携を取るとともに、各々で取り組めることを明確にした。

北海道医療大学では「当別町二万人歯の健康プロジェクト」と題した健康支援構想を持ち、歯の健康プラザでの活動につなげた。

- 1) 歯科健診：歯科医師と歯科衛生士による「お口の健康チェック」「歯の健康相談」「歯みがき指導」ではいけないでプロフェッショナルなブラッシング技術が提供された。
- 2) 成人歯科健診：巡回ドックや事業所の健診と同時実施の体制で、自営業者、主婦、働き盛りの男性などへの健康の意識改革に取り組んだ。
- 3) 妊婦に対する口腔健康教育：これからの子育てに役立つ健康管理の基本を学ぶ場となった。
- 4) 地域住民との交流、学生の住民参加：「健康」をテーマとし、多彩なイベント、ハーブティー教室、チーズ教室、そばうち体験、ヨガ・気功講習会、一日歯医者さんなど地域との文化的事業の連携や地域行事への参加に貢献した。

課題

各々良い事業を展開していただいたが、周知や認知度の点で一部の方に限られ、利用者数に反映されなかったことがあげられる。具体的な事業の準備、広報、参加者の意見のフィードバックなど、企画調整の機能が発揮されることが望ましい。いずれにしても、こうした活動は今まで住民にとって格別意識されることのなかった大学や学生との関係に変化を生じさせることとなった。今後も官ではできない自由な発想を生かし、歯学部、薬学部、看護福祉学部、心理科学部の4学部を持つ大学ならではのユニークな取り組みに大きな期待を抱いている。

取組支援期間終了後の展開

本取組は平成18年度をもって終了した。しかしながら、この3年間に行ってきた健康をテーマにした地域支援、及びそれと連携した学生教育が終了するわけではない。この経験と実績を踏まえ、新たな展開を提案している。既に大きな成果が上がっているもの、あるいはその流れができていく案件についてはさらに強力に推進すべきであり、一方、問題点のある案件については早急に改善策を打ち出し、今後の展開について町と大学が連携してアイデアを出し合い、双方のニーズに応える形としたい。

見直し、あるいは改善していかなければならない案件は2件である。

1件目は、町内の歯科健診体制である。全員健診を目指すための対策を打ち出す必要がある。そのためには、健診の場の問題、健診に当たる人材の確保、資金の確保、住民の歯科に対する意識を変容させるための対策などが挙げられる。住民のニーズを開発するような教育体制、広報活動などを地道に行っていく必要がある。

2件目は「歯の健康プラザ」の有効活用である。現状の問題点は理想と現実との離れである。第一次予防は大切であるが、住民にそのニーズがない。特に当別町のような大都市近郊という立地条件を考慮すると困難が予想される。ニーズを作り出すにはこれも地道な教育が必須である。そこで、プラザでの歯科健診のみの業務は早期に終了とし、本学の人材を活用し、全身の健康、特に生活習慣病、メタボリック症候群など住民の関心事と一致させた相談コーナー、講習会を行う場としていきたい。さらに薬学部教員によるお薬相談、看護福祉学部教員による介護予防講座、栄養士による栄養相談、外国人教員による英会話教室、SPによる医療面接課外授業などを展開し、住民の学びの場、サテライトキャンパスとしての学生教育の場とするべきであると考え。また、子ども達との交流の場として土日遊び場として開放し、学生あるいは老人クラブの方々に監督、指導してもらうなどのプロジェクトを考えている。折しも文部科学省では小学生の放課後交流などを懸案事項としており、その具体案を提示できる可能性がある。場所も歯の健康プラザにこだわることなく、「出前」なども行う。

本件お問合せ先 北海道医療大学歯科内科クリニック

電話：0133-23-1211 内線 3505 e-mail: yajima@hoku-iryu-u.ac.jp